

京都教育大学フォーラム2021

「真正の学び」を創り出す小中高・大の協働 —京都教育大学「グローバル・スタディーズ」の成果—

開催日：2021.12.18（土）14:00～16:00（オンラインライブ配信）

* 後日、「趣旨説明」・「基調講演」はオンデマンド配信を行います。

【実践紹介】

1. 京都府立東宇治高等学校

小林 未来（京都府立東宇治高等学校 教諭）

神代 健彦（京都教育大学 准教授）

2. 京都市立開晴小中学校道徳部会

田淵 久美・江口 葉（京都市立開晴小中学校 教諭）

3. 京都教育大学附属高等学校

吉田 竹史・永石 あずみ（京都教育大学附属高等学校 教諭）

【当日のプログラム】

○ごあいさつ

太田 耕人（京都教育大学 学長）

○趣旨説明*

濱田 麻里（京都教育大学 教授）

○基調講演*

北村 厚（神戸学院大学 准教授）「グローバル・ヒストリーから考える20世紀」

○全体討論

主催：京都教育大学

後援：京都府教育委員会・京都市教育委員会

ごあいさつ



太田 耕人 (OTA Kojin)

◆京都教育大学長

今年のフォーラムは、「グローバル・スタディーズ」の成果をご披露します。

本学の機能強化の一環として「グローバル人材育成プロジェクト」がスタートしたのは2014年のことでした。翌年には、附属学校園でグローバルな視点を含む40の授業を公開しました。それを基礎として、2016年度に「グローバル人材のためのカリキュラム開発と教員養成」の取組を立ち上げ、「幼稚園から高等学校における発達段階別学習目標に基づいた実践授業のカリキュラム化」を目指すことになりました。

なにしろ、「幼稚園から高等学校」です。発達段階別という視点を立てるとしても、この壮大なテーマにどう対処すべきか。当面は引き続き授業公開をおこない、現場の実践から手さぐりで知見を拾いあげるしかありませんでした。

転機が訪れたのは2017年です。教科横断的に「グローバル・スタディーズ」という領域を設定し、各学校段階の授業のなかにあるグローバルな見方を括りだして、カリキュラム開発をすることになったのです。3つの主題別授業群が構想されました。グローバルな問題を通時的に理解する「グローバル・ヒストリー」、共時的に把握する「グローバル・イシュー」、グローバル化で生じる問題を倫理的価値の観点から掘り下げる「グローバル・エシックス」です。グローバル化を立体的に捉えるための、縦・横・奥行き3つの座標軸がそろいました。

グローバル化に対応した教育は従来からありました。第二次大戦直後に世界市民性を謳ったユネスコの「国際理解教育」、英国で1960年代に生まれた「ワールド・スタディーズ」、1970年代の米国の「グローバル教育」等は、それぞれ異なる要素に重心を置きながら、現在で言うグローバルなものを見方を育むことに取り組みました。

ただし、限りある授業時間数のなかで新教科を設置することは、いつの時代も困難でした。グローバル化のパースペクティブを折にふれて提供したり、グローバルな問題をめぐって複数教科の学びを関連づけたりする試みがされましたが、環境破壊、人権、マイノリティ、シティズンシップなど、課題がともすれば社会科の領域に偏る憾みもありました。それにひきかえ、本学が提案する「3つの主題」は、ほとんどの科目で見いだすことが可能だと考えています。

グローバル化の意識を養った子どもたちは、身近なことがグローバルな連関のなかにあることを理解できるようになるでしょう。それとともに、マイノリティである日本在住の外国籍の人や帰国子女に日本への同化をもとめるのではなく、異なる価値観を持つ存在としてフラットにつきあっていく心性も育ててほしいと思います。そうした内なる国際化もまた、いま学校教育で心すべきたいせつな目標ではないでしょうか。

趣旨説明

濱田 麻里 (HAMADA Mari)

◆京都教育大学教育学部／教授



専門は日本語教育学。研究テーマは外国人児童生徒等の教育を担う教員の成長過程。文化審議会日本語教育小委員会副主査，文部科学省外国人児童生徒等教育アドバイザー等。近著に「外国人幼児に対する教育を担う教員に求められる資質・能力の検討—文部科学省モデルプログラムを踏まえて—」

京都教育大学では2014年度から8年間にわたり附属学校園と大学との連携の下で「グローバル人材育成プロジェクト」に取り組んできました。附属学校の強味を活かし幼稚園から高校まで（特別支援学校も含む）の発達段階を見通しつつ，グローバル化した現代社会を生きる人に必要な教育の在り方を考えることを目指しました。その成果として教科横断的な独自領域「グローバル・スタディーズ」を提案しました。

開発の過程では，多くの学校の先生方にご協力いただきました。附属学校の先生方とグローバル・スタディーズの考え方に基づいた授業開発を開始したのは2017年からでした。2020年からは公立学校の先生方にご協力いただき，さらなる授業開発に取り組んできました。

そこで本フォーラムでは，京都教育大学のグローバル人材育成プロジェクトの総括として，研究開発にご協力くださった京都市立開晴小中学校，京都府立東宇治高校，本学附属高校の3校から実践のご報告をいただき，「グローバル・スタディーズ」を踏まえた小中高校と大学の協働が「真正の学び」を創り出す可能性について考えたいと思います。

3つの実践報告を事前にご覧いただいた上で，フォーラム当日の議論に参加いただけましたら幸いです。

基調講演

グローバル・ヒストリーから 考える20世紀



北村 厚 (KITAMURA Atsushi)

◆神戸学院大学人文学部／准教授

1975年福岡県生まれ。九州大学大学院法学府で博士号を取得。法政大学兼任講師、東京成徳大学高等学校専任講師等を経て現職。専門はドイツ政治・外交史、高校世界史から見るグローバル・ヒストリー。著書に『ヴァイマル共和国のヨーロッパ統合構想』『教養のグローバル・ヒストリー』『20世紀のグローバル・ヒストリー』(以上ミネルヴァ書房)

来年度から高校で始まる「歴史総合」は、世界史と日本史を融合して近現代史の諸テーマについて歴史的思考力を深める科目になる。しかし、私たちはどのようにして世界史と日本史を結び付ければいいのか。それはただ両者を時代ごとに並べたり、日本史を世界史の文脈の中に位置付けて考えたりするものになるかもしれない。前者は諸地域の束に日本が加わるバラバラの世界史で、後者はあくまで日本が中心になる。

それでは、日本史もその一部として世界史を一体化し、どこかに中心を定めることなく、どの地域にとっても自分事として理解できるような歴史を構想することは、はたして可能なのだろうか。「グローバル・ヒストリー」という考え方は、このような関心から構想される歴史の見方である。しかし20世紀の歴史をグローバル・ヒストリーの視点から再構成する研究は、これまでほとんどなかった。

本講演では、講師の近著である『20世紀のグローバル・ヒストリー』のコンセプトや内容を中心に、なぜ20世紀のグローバル・ヒストリーは困難なのか、どうすれば人類的な問題を全体的な歴史としてまとめることができるのか、その作業を通じて私たちは何を学ぶことができるのかといった諸問題について、中等教育での実践も視野に入れて考えていきたい。

実践報告

実践紹介① 京都府立東宇治高等学校 「“知”の世界地図をつくろう！」

ヒト、モノ、お金、情報、その他あらゆるものが国や地域などの地理的境界、枠組みをこえてつながることをグローバル化と呼ぶとするなら、じつは知というものもその例外ではありません。今回提案する「“知”の世界地図をつくろう」は、2400年以上の長きにわたる哲学や思想（知）のグローバル化の、その葛藤を含んだダイナミックな展開について、探究的に学ぶ授業です。2020年12月に実施された3時間にわたる授業とその背景にあるコンセプトについてご紹介します。

実践紹介② 京都市立開晴小中学校道徳部会 内容項目：「友情・信頼」 教材名 前期課程「たつきゅうは4人まで」 後期課程「ゴール」

「自分事として向き合う自己指導力を育成する授業づくり」

性別、国籍、身体的な特徴や困り、多様な価値観と感覚、成育歴など互いの違いを認めて逃げたりごまかしたりせずに、相手に向き合うことは、子どもでも大人でもなかなか難しいことです。

今回は、特別な教科道徳の時間の授業づくりを通して、今の子どもたちの課題を捉え、子どもたちにどう「自分事」として考えさせるのか、そのために、同じ話し合いの土台に子どもたちをどう乗せていくのかについて部会で半年間話し合ってきたことを授業実践とともに紹介します。

実践紹介③ 京都教育大学附属高等学校 「『笑い』を通して世界を見る目を養う」

稲作が伝わったとされる時代、その当時の人々は神との語り合いを生活の拠り所としてきました。祭りを催し、神に歌や舞いを捧げ、作物の豊穰を願ったとされています。これが「笑い」の原点です。私たちはこうした笑いの歴史をきっかけとして、学問的な分析を参考に研究課題(リサーチ・クエスチョン)を設定し、探究活動を進めてきました。笑いをテーマに、今日的なグローバル社会の問題点を、古典や歴史、土着文化や風俗の考察の中に視点を広げ、共時的に考察するだけに留まらず、通時的観点に立って展開した活動内容をご紹介します。